『通信』 II 第三号

ごあいさつ

目次

ごあいさつ 1
2015年春季大会 1－5
2015年秋季大会 6－10
国際シンポジウム開催のご報告 11
問い合わせ先・連絡事項 11

『通信』 II、第三号をお届けします。今回は、2015年春季大会および秋季大会の模様をお伝えします。なお、本誌に掲載しております報告者の所属は報告時のものです。

2015年春季大会報告

2015年3月22日（日）にキャンパスプラザ京都・京都大学サテライト講習室（6階第8講習室）にて、2015年春季大会が開催されました。

午前の部は、河合隆平氏（金沢大学）の司会のもと、倉石一郎「アメリカ教育福祉社会史序説---ビジティング・ティーチャーとその時代」の合評会が行われました。コメンティタは宮本健市郎氏（関西学院大学）と柏木敦氏（大阪市立大学）でした。

午後の部はジェンダー部会のセッション「ジェンダーから比較教育社会史を考える」が開催されました。司会・趣旨説明は北村陽子氏（愛知工業大学）、報告者として石井香江氏（同志社大学）と香川せつ子氏（西九州大学）が登壇された。石井氏は「職業教育と労働のジェンダー化：近代日独の電信・電話に注目して」というタイトルで、香川氏は「「女性・ジェンダー・教育」の歴史ー研究の到達点と課題：イギリス女性史研究会のあゆみ

をもとに」を報告されました。

詳細は以下の報告の通りです。ご参照ください。

倉石一郎『アメリカ教育福祉社会史序説–ビジティング・ティーチャーとその時代–』合評会報告

正木遥香（広島大学大学院　院生）

2015年3月22日、キャンパスプラザ京都にて、倉石一郎氏の『アメリカ教育福祉社会史序説–ビジティング・ティーチャーとその時代』（春風社、2014年）の合評会が開催された。まず、コメンテーターの宮本健市郎氏と柏木敦氏から提示された論点や質問に倉石氏が応答し、これらを元に参加者同士が議論を交わした。以下にそれぞれの概略を記したい。

まず、アメリカ合衆国における新教育運動の展開を研究されている宮本氏は、学校による社会改造を理念とする進歩主義教育思想の射程には、ビジティング・ティーチャーも入っていたと述べた。その上で、ビジティング・ティーチャーが何を目的とし、どのような人間の育成を目指したのかを問うた。続いて、日本の初等教育就学の拡大過程について研究をされている柏木氏は、日本では教育以外の領域が学校に取り込まれにくいのに対し、アメリカ合衆国では「教育」に関わる仕事の分業化が見られたと指摘した。柏木氏は、これらの違いが初等教育就学の拡大過程における教員の役割の違いによって生じたと考え、日本においては集団性維持や階級感情融和の役割を果たしていた就学拡大期の教員像が、アメリカ合衆国ではどのようなものであったかを問うた。宮本氏と柏木氏に共通していたのは、ビジティング・ティーチャーが複数の軸を有する社会思想とどのように関係を結び、どのような教育観を前提としていたのかという視点であったように思う。倉石氏はこれらに対し、ティーチャーという言葉の含意、教育と福祉の関係性という二つの観点からビジティング・ティーチャーの役割を整理し、応答を試みた。倉石氏によると、ティーチャーという語には「子どもに関する知識をもつ存在」という含意があり、権力を行使する取締官との対比があったという。それゆえ、ビジティング・ティーチャーには、子どもへの働きかけという役割が期待されていた。具体的には、皆学を滞りなく実現させるため、学校に来ない子どものマネジメントを教師にかわって遂行し、皆学の対象からもれる子どもを見つけた場合は、学校以外の場所で異なる対処をする、ということがなされていたようだ。他方で、福祉の領域に属するソーシャルワーカーは、子どもへの直接的なはたらきかけを規制する立場にあった。ゆえに、のちにソーシャルワークの専門性がビジティング・ティーチャーの資格要件となったことは、スクールソーシャルワーカーが教師であることから脱却した（＝本書における、「福祉は教育に勝利した」という表現）と解釈できるという。

続く全体討議では、大きく分けて二つのことが議論となった。一つは、ビジティング・ティーチャーの専門性と女性の地位がどのように関わっていたのかということ、もう一つは、ビジティング・ティーチャーが学校の内外でどのような役割を果たしたのかということであった。

一つ目の論点に関しては、そもそも初期のビジティング・ティーチャーが女性であったのはなぜなのか、その後の専門職化によってどのような変化がもたらされたのか、という質問がなされた。また、これらの問いに関連して、ビジティング・ティーチャーの専門職化が、学校の内部にいる教師とは異なる専門性の付与を意味しており、結果として学校の内部にいる教師を優位に、学校の外部にある福祉やケアの専門性に従事する女性たちを下位に置くことにつながっていたのではないか、という指摘もなされた。倉石氏はこれに対し、まず、ビジティング・ティーチャーの起源が、高等教育を受けた女性たちを主たる担い手としたセツルメント（社会改良運動）にあったことを確認した。これらの女性たちは自ら生計を立てる必要のない富裕層に属していたが、その後、ビジティング・ティーチャーの専門職化に伴って教職経験者が流入し、より下の階層の人が増加するという階層的な比重の変化が生じたとされる。さらに、こうした専門職化は、女性の地位を一定程度上昇させたという。というのは、かつて下支えの立場として学校システムの最下位に置かれたビジティング・ティーチャーが、ソーシャルワークの専門家としての立場を学校外に持てるようになり、同様の業務であっても異なる意味合いが認められるようになったためだとされる。

二つ目の論点については、ビジティング・ティーチャーが捉えていた子どもたちの困難はどのようなもので、それらが学校で行われていた活動とどの程度関連していたのか、また、ビジティング・ティーチャーはそれらに対してどのような立場をとっていたのかということが問われた。これについて、倉石氏は、資料の限界で十分解明できなかった部分があると断りつつ、当時の学校は将来役立つと考えられた職業教育だけではなくレクリエーションや遊び的な活動も含んでおり、ビジティング・ティーチャーは後者の進歩主義的な価値観に基づき、子どもたちの「よき友」として関わっていたと述べた。一方で、ビジティング・ティーチャーは学業不振の子どもたちの学力を引き上げることも職務としていたため、特定の能力の獲得を指向する本質主義的な論理も学んでおり、矛盾や葛藤を抱えていたと予測されるという。なお、こうした矛盾や葛藤については、本書では通史的な構成が優先されており、制度や待遇の記述はあるものの、ビジティング・ティーチャーがどのような葛藤を抱えつつ実践を行っていたのかが見えてこなかった、という指摘もなされた。倉石氏は、物語的な実践記録の扱い方に迷いがあったが、少なくともマジョリティの立場にあるビジティング・ティーチャーがマイノリティの立場の子どもたちと関わる際には、嫌悪や侮蔑といった差別的な感情をもつ一方で、なすべきことを自覚して関係性を作ろうとしたと推測できると応えた。

倉石氏の著書は、従来の研究において自明視されていたように思われる教育の立ち位置を、福祉と教育の境界に位置するビジティング・ティーチャーを媒介とすることで問い直し、再編を試みたものとして読むことができる。それゆえ、当日の議論は、非常に多様な論点が提示されつつも、一貫してビジティング・ティーチャーを取り上げることで見えるようになったもの、見えにくくなったものを一つ一つ確かめていくプロセスとして進行したように思う。ビジティング・ティーチャーという「周辺」に着目することで見えるようになったものには、教育と福祉という二項対立図式における両者の接点と越境の可能性があったが、倉石氏は越境の危うさにも触れており、教育と福祉の双方を視野に入れる必要性を非常に説得的に描いていた。一方で、教育と福祉が学校教育を共同して支えるあり方や、学校教育がもつ前提については不明瞭な部分も認められ、「中心」と「周辺」を往還するような研究のあり方が今後の課題として示された。従来の研究領域を拡張させることと自身の研究の立場性を示すこととの両立は、葛藤に満ちた過程であることは想像に難くない。しかしながら、今回の討議

から、こうした課題が参加者間で共有されていると実感できたことは、今後、研究を進めていく際の大きな力になるように感じた。

「比較教育社会史におけるジェンダーを再考する–性の特有さを超えて–」セッション参加記

井岡　瑞日（立命館大学他　非常勤講師）

2015年3月22日、キャンパスプラザ京都において比較教育社会史研究会春季例会が開催された。午後のセッション「比較教育社会史におけるジェンダーを再考する–性の特有さを超えて–」では、北村陽子氏（愛知工業大学）司会のもと、石井香江氏（同志社大学）、香川せつ子氏（西九州大学）両名の研究報告、及びフロアとの質疑応答が行われた。北村氏によると、セッションの趣旨は「ジェンダー」概念をめぐる研究の進展状況を踏まえ、これからの課題を見据えることを通して「比較教育社会史におけるジェンダー」を問い直すことであるという。以下、報告の概要をまとめた上で私の感想を述べたい。

石井氏の報告タイトルは「職業教育と労働のジェンダー化：近代日独の電信・電話に注目して」であった。ここで取り上げられるのは「コミュニケーション革命」の下、新たなセクターとして登場した日独の通信事業である。これらは公企業によって担われ、電信技手や電話交換手として女性職員が先駆的に導入された職種である。石井氏は冒頭で「サービスの供給主体としての公企業が、どのように利用者の信頼を獲得したのか、そしてそこに、どのようなアクターを通じて、どのような方法で、ジェンダーという要素が意味を持つことになったのか」という問いを設定する。その背景には、「女性職」／「男性職」という性別職務分離メカニズムへの同氏の問題関心があるのだという。報告は「教育とジェンダー」をテーマとした従来の歴史研究の中で傍流に位置づいてきた職業教育に焦点を当てる。そして、戦前日本の通信事業における状況が同時代のドイツとの比較を通じて検討されていく。電話交換手の養成は日独共に各電話局に委ねられていたが、日本のドイツとの違いは局内学校–大阪・相愛家政補習学校（大正8年創立）、東京・誠和女学校（大正9年創立）–の存在にあった。これらの学校は職業訓練を行うのみならず、電話交換手としての「品性」を獲得し女性の模範となるための修養を積ませ、結婚して退職した後に役立つ知識や技術を伝達することを目的としていた。同時に、経済的事情で上級学校に進むことができなかった少女らの向上心や娘を安心して働かせたいという「父兄」の願いに適うものであった。戦前期における日独の通信事業の拡大は、経営側の一方的な意向や戦略だけではなく、女性労働者の職能やこれに対する利用者の評価の相互作用に拠るものでもあった。

これに次ぐ香川氏の報告タイトルは「『女性・ジェンダー・教育』の歴史–研究の到達点と課題：イギリス女性史研究会のあゆみをもとに」であった。この中で同氏は、分析概念としての「ジェンダー」が導入された1980年代以後、その斬新さが徐々に薄れるとともに概念の曖昧さが露呈してきたことを指摘し、「ジェンダーを歴史研究の切口とすることは、もは

や時代遅れとなったのだろうか」と問題提起する。そして、1995年に発足し、多彩な視点と手法から活動を積み重ねてきたイギリス女性史研究会の軌跡を中心に、日英の女性史やジェンダー史研究の動向について丹念な分析を試みている。その結果、比較教育社会史研究はジェンダーという枠組みにおいて以下のような課題を抱えているのだという。1つには、教育の社会的機能に着目することで「ジェンダーが歴史的にどのようにイメージされ、社会的制度として構築され、機能してきたか」を明らかにすることである。例えば、19〜20世紀初頭、女性はその「身体的・精神的特性」から高度な教育に不向きであるとされ、近代医学や科学は男性特有のものとみなされる傾向にあった。こうした経緯を分析の俎上に載せることで、これらの学問領域のジェンダー化された構造をひもとくことが可能となるわけである。また、2つには、「歴史叙述におけるジェンダー戦略、ジェンダーの視点、分析による歴史叙述」を取り入れることである。そのためには、従来の学校教育中心主義や偏狭な「実証主義」、一国教育史から脱却し、個人の体験等を含むより広い視野で人間形成を把握していくことが重要であるという。

日独の膨大な史料を運用して職業におけるジェンダー構造の解明を目指した石井報告と、ジェンダーをめぐる比較教育史研究の現状と課題をクリアに切り出した香川報告に続き、フロアを交えた活発な議論が交わされた。質疑応答では、石井報告における日独の差異がより明確になったことが印象的であった。例えば、ドイツでは女性電話交換手たちによる当事者団体が活躍していたのに対し、日本では「父兄会」が開催され、「良妻賢母教育」や「品性修養」といった非当事者の目線から女性の職業教育が語られる傾向にあったようである。労働のジェンダー化にあたって、「女性らしさ」を利用した企業のイメージアップ戦略や「父兄」の意向がドイツと比べるとより強く作用したということであろうか。そうした両国の差異が各々のどのような社会的・文化的状況に起因するものであるのか、より詳しく知りたいと思った。

男性中心の学校教育史がいまだ教育史研究のメインストリームを形成する中、上記報告や議論には興味深く耳を傾けると同時に、自身の無知や不勉強を改めて実感する機会となった。私は近代フランスにおける子育ての歴史をさぐり調べる者であるが、自身の研究に引きつけて考えると、親が子を育てるという営み一つとっても、父か母か、息子か娘かという教育者・被教育者の性別、及びその組み合わせによって教育の目的や方法、性格には多元性が生じる。そうした子育てをめぐるジェンダー規範がどのように形成され、表象され、社会にどのような影響を与えたのかという問題について探求していかなければならない。そのために今の私がすべきことは何か。香川報告で紹介されたイギリス女性史研究会ニュースレター上のリレー討論「いま、女性史に問われているもの」では、女性史かジェンダー史か、あるいはそうした学問的枠組みにとらわれることの窮屈さといった点について、「女性」の歴史に対峙するにあたっての各人各様の思いが綴られている。これらを読みながら、月並みではあるが、ジェンダーという概念やその使い方について私なりに深く考えをめぐらせる時間をもつことが重要なのだと改めて思った。今回のセッションを機に再発見した研究上の課題に少しずつ取り組んでいきたいと考えている。